

解答

□

問一 a 脳 b 未熟 c 形成 d 大群 e 感覚

問二 月面に残した「アジアト」を「ソクセキ」に格上げすること

問三 A カ B イ C ア D エ

問四 足跡が狩りに行った父に残された母と二人の子供のものという見方

問五 I 脳が大きくなり、重い頭部を支えるために立ち上がった動物が人類か、という論争。

II 足跡を残した三人はどんなグループだったのか、という論争。

問六 イ

問七 おびえ

□

問一 a 態度 b 真剣 c 即座 d 目標 e 壮健

問二 武士に～はない

問三 ウ

問四 果合いの約束をしたのに和解の申し出をした大六を臆病だと思い、見下したから。

問五 来たるべき戦で活躍することが大六にとって大事であり、果合いでの評など小さなことで気にならないこと。

問六 オ

問七 ウ

問八 イ

解説

□

出典は、藤原智美「三人の人類」。

常識や一般に考えられることとは違う、筆者の考え方を読み取るという、説明文の典型的な問題です。自分の常識や知識を当てにせず、文章から筆者の言いたいことを読み取りましょう。

問二 指示語の問題です。後ろのヒントをしっかりと押さえてから、答えとなる内容を直前→さらに前…と探していき

ます。ではさっそく、直後を読むと、「それは歴史の判断に任せるべきだった」（7・8行め）とあります。そこで「歴史の判断に任せるべきこととは何か？」をヒントにして直前を読むと、「アジアトをソクセキに手前勝手に格上げされては困る」（7行め）とあります。ここから、ヒントに合う内容が「アジアトをソクセキに格上げすること」であると分かります。これが答えの中心（後半に書くこと）です。次に、この部分での「アジアト」とは何か、を考えます。すると5行めに「月面に残した自分のアジアト」とあるので、これを答えの前半に持ってくればよいのです。これにより答えは『月面に残した「アジアト」を「ソクセキ」に格上げすること』になります。

問三 接続語および副詞の問題です。 A 直後に「このグループが、家族であったろうと推測するのが妥当である。」

（34行め）とあり、最初にだれもが考える妥当な推測が来ているので、カ「まず」が入ります。 B 直前の「人類は…出産に不向きになる」（35行め）が原因、直後の「…ミジクなうちに産み落とし…長い間育てなくてはならない」（36・37行め）が当然の結果となっていることから、順接のイ「よって」が入ります。 C 直前に「母親」、直後に「子供」というように、父親の後ろにつく二人が書かれているので、並立か添加が考えられますが、選択肢にはア「さらに」という添加があるのでこれが答えです。 D 直前までは「妥当な推測」が書かれていましたが、直後からは「真家さん」の「独特な見方」が書かれ始めます。なので逆接のエ「しかし」が入ります。

問四 まず、問いに「どのような見方」とあるので、答えの最後は「～見方」で終わらせましょう。次に、「真家さん」

の「独特な見方」についてかかれているところを探すのですが、これはすでに問三Dでみたとおり、——線②の直後からだと分かっています。そこから「妥当な推測」とは違う見方を押さえていきます。「妥当な推測」では三人が「父母子」であったのに対し、真家さんは「父親は狩り…先に獲物を追いかけて三人の家族をおいていったのではないかとすると、残されたのは母親と二人の子供。彼らの足跡ではないか」（42～44行め）と推測しています。ここをまとめましょう。答えは『足跡が狩りに行った父に残された母と二人の子供のものという見方』になります。

問五 問いに「どのような論争」とあるので、答えの最後は「～論争」で終わらせましょう。また、字数指定はありませんが、問いに「簡潔に」とあるので、どれだけ要点を絞るかが大切です。 I 後ろを読むと「…という説

は完全にくつがえされた」（19行め）とあるので、「人類学の論争」はこの説で争っていたこととなるので、この前の「猿よりもノウが大きくなり、重い頭部を支えるために立ち上がった動物が人類」（18・19行め）をまとめれば良いと

イ言うことになります。「論争」なので「〜か」という疑問を表す言葉を入れるとよいでしょう。答えは『脳が大きくなり、重い頭部を支えるために立ち上がった動物が人類か、という論争。』です。Ⅱ ——線の前後を読むと「しかしこの足跡、あらたな論争を生んでいる」とあるので、前とは違う論争であり、論争の内容は線より後ろだと分かります。するとこちらにも28行めに「さまざまな説がある」とあり、何に対しての説なのかはこの直前の「彼らはどんなグループだったのか？」だと分かります。ここを答えの土台にして行けばよいのです。問題は「彼ら」という人称代名詞がだれを指すか、だけです。まず複数形であり、27行めに「三人」とあるので、「三人」を使います。そして線の直前に「この足跡」とあったので、これを足し、「足跡を残した三人」というふうにまとめます。答えは『足跡を残した三人どんなグループだったのか、という論争。』です。

問六 慣用句の問題です。筆者は真家さんの見方に納得できるものがあつたのです。「納得できる・合点がいく」という意味の慣用句は、イ「腑に落ちる」です。

問七 (Y) の前後をきちんと読んでいきましょう。まず54.55行めに「おそろおそろ行くこの三人を結びつけていた感情は、ひとことでいえばおびえではなかったか」とあり、57行めに「昨今、家族のもろさが指摘されるが、その一因には (Y) の喪失がある」、58行めに「(Y) が…家族として共有されなくなった」とあることから、三人が持っていたが、昨今は失われたもの、つまり「おびえ」が答えです。

☐ 出典は、山本周五郎「ならぬ堪忍」。

入試では珍しい、江戸時代を舞台とした時代小説が取り上げられました。時代小説特有のなじみのない表現に引っかかることなく、「作者がこの物語で何を伝えたいのか」を正確に読み取れるかが勝負の分かれ目となります。

問一 開智中学の入試では、中学校配当の漢字も出題されますので、覚悟しておいてください。しかし、特別に中学校の漢字の勉強する必要はないと思います。まず、小学校配当の漢字1006字をしっかりと覚えたいので、「シリーズ」や「週テスト」の問題文をしっかりと読み、記述の時に漢字を多用するようにすれば大丈夫です。

問二 ——線①「侍の命は、一度御主君に捧げたものだ」の言い換えを探す問題です。「侍」や「命」、「捧げた」をヒントに根気よく探しましょう。すると、最後の行にある「武士には御奉公のほかに捨てるべき命はない」(68行め) がちょうど「二十字」で、問いの条件に合います。

問三 この後を読んでいくと、22行めに「思い止められないというのなら」とあり、「果合い」をする決意が変わっていないことが分かります。

問四 まず、「嘲笑」の意味が分かっていないといけません。訓読みすると「嘲(あざけ)りわらい」となり、「相手を見下した、馬鹿にした笑い」という意味です。では大六のどのようなところを嘲笑したのでしょうか。——線③の直前に「和解しようという大六の申し出が」とあり、「和解の申し出」に嘲笑された理由があると分かります。これを押さえて続きを読むと、41・42行めに城中の大六のよくない評判、「いったん果合いの約束までしたのなら、いさぎよく勝負すべき…約束を取り消すというのはむしろ臆病…」が書かれています。つまり大六を「臆病」と考えたからですね。これをまとめた、『果合いの約束をしたのに和解の申し出をした大六を臆病と思い、見下したから。』が答えとなります。

問五 問いに「どういうこと」とあるので、答えを「こと」で終わらせる必要があります。また、「どういうこと」という問いは、——線の引かれた部分を言い換えて説明することを求められた問いだということも覚えておかなければなりません。「痛くも痒くもなかった」とは「全く気にならない・平気である」という意味ですので、これを答えの最後に持ってきます。次に何が気にならないのかを考えますと、——線④に「どんな評を聞いても」とあるので、「果合いでの評」が気にならないのだと分かります。ではなぜ大六は評が気にならないのでしょうか。49・50行めに「大六にはどちらでもよい評判で、彼はただ来るべき戦いということをもクヒョウに」とあり、来るべき戦いという目標があつたから気にならなかつたのです。これを前半に持ってきて『来るべき戦いで活躍することが大六にとって大事であり、果合いでの評など小さなことで気にならないこと。』というふうにまとめましょう。

問六 直前に注目しましょう。「では大六の面目はどうなるのですか、重助づれに土下座をして謝った私の武士道」とあることから、「面目」がキーワードだと分かります。また、「重助づれに土下座をして謝った」という表現から、恥をかいたことを悔やむ気持ちが読み取れます。

問七 問いに「この時の又十郎の思い」とあることから、直後の又十郎のセリフから答えを考える必要があります。特に注目すべきは最後の行の「繰返して云うが」(68行め) でしょう。又十郎の思いは繰返して云われたのです。答えは、「さむらいには御奉公のほかにならぬ堪忍などというものはないのだ」(63・64行め) 「武士には御奉公のほかに捨てるべき命はない」(68行め) と一致する選択肢、ウになります。

問八 「つまり」という換言の接続語に注目しましょう。『ならぬ堪忍』の言い換えが「つまり」の直前にあるわけです。「戦争があるぞと聞いただけで、土下座までして果合いをとり消した」(62・63行め) とあることから、果合いは「ならぬ堪忍」ではなく「なる堪忍」、「できない堪忍」ではなく「できる堪忍」だったということです。「堪忍」とは「我慢」と同じ意味ですね。答えはイです。